

■ 目先は材料出尽くしでドル安一巡からやや切り返す動き

「あれからちょうど1週間」ということになる。トランプ大統領が8/1のNY時間帯に対中制裁関税の「第4弾」を9/1から発動するとの意向を示してからである。

結果、それまで109円台にあったドル/円が一時的にも105円台半ばまで急落し、一方でNYダウ平均が26000ドルを一旦割り込んだのはじめ、他の主要指数も軒並み大きく下落した。当然、この株安は東京市場や上海・香港市場などにも波及し、足下では全体にリスクオフのムードが色濃く漂い続けている。

「米政権による追加の対中制裁関税」、「中国を為替操作国に指定」、「米国産農産品の一時輸入停止」と、これだけ揃えば「もはや出てきそうなものは一旦すべて出尽くした」との感もないではないわけで、目下の市場は少しずつ落ち着きを取り戻そうとしているように見える。正直、頭の片隅には「どうせ8月末までには、追加の対中制裁関税『第4弾』の発動も暫くは見送る方向で調整される」といった希望的観測もないではない。

トランプ氏は、自ら株安を仕掛けるような真似をしておいて、その責任を米連邦準備理事会(FRB)になすりつけようと口汚く罵る。悔しいかな、本当に「第4弾」が発動されて中国が直ちに報復に打って出るなどという展開になれば、結果的にFRBが追加利下げを検討しなければならなくなることも事実ではある。

あまりにもトランプ氏の“声が大き”ことから、市場では俄かに追加利下げ観測が盛り上がる。結果、債券に向かうカネの流れが過度に強まり、昨日(8/7)も米10年債利回りは一時1.5931%という「とても尋常とは思えない水準」にまで低下する場面があった。「本当に先行きが極めて不透明…、まったく読めないから一時的にも安全資産に避難させておこう」と考えるマネーは、債券のみならず金(ゴールド)にも向かう結果となっており、あろうことか昨日のNY金先物価格(12月限)は、前日終値比+35.4ドルの1519ドルまで急騰した。

2020年11月の米大統領選を睨み、できるだけ早く何らかの成果を挙げたいトランプ氏に対して、中国側は「原則問題」で絶対に譲歩しない。そもそも米中間交渉の妥結を急いではいない。このところのトランプ氏の挙動を“勇み足”と見る向きも少なくはないだろう。だからこそ突然の“暴発”を恐れ、市場は警戒姿勢を強めているのかもしれない。

とはいえ、一昨日(8/6)の米CNBCではクドロー米国家経済会議(NEC)のクドロー委員長が「トランプ大統領は中国の協議継続を望んでいる」、「中国への関税についての状況は変わり得る」などと述べており、実際にそうなれば再び市場にはリスクオンムードが舞い戻ってくる可能性もある。

貿易問題で目先の中国から具体的な譲歩・妥協を何ら引き出せないとなれば、そこはトランプ氏の方が少々妥協して、以降は“人気取り”の手法を変えてくる可能性もある。そもそも株高を演出すること自体が最も有効であることに変わりはない。よって、今は手放しでドル安にベットすることも容易ではない。つまり、今しばらくドル相場はもみ合いを続ける可能性が高い。

8/5にドル/円は一時105.49円まで下押したが、いまだ2016年6月安値と今年1月のフラッシュ・クラッシュ時の安値を結ぶラインを明確に下抜けたとは言えない。むしろ、執筆時点では同ラインが下値サポートとして機能したとの感が強い。

7月10高値と8月1日高値をダブルトップとするならば、そのネックライン(7/18安値=107.21円)から下方にとれるセオリーに基づいた目安水準も105円台半ばあたりとなる。よって、ここは「(悪材料)出尽くしから切り返し」であろうと個人的には見る。

一方で、ユーロ/ドルは直近(8/6)高値=1.1249ドルが一目均衡表の日足「雲」下限や3週移動平均線あたりの水準に上値を押さえられる展開となっており、そろそろ戻り一巡となる可能性が高いと見る。当座は、1.1205ドル処を軸に1.1170ドルー1.1240ドルの間での値動きになると見る。
(8月8日 11:35)